

2018. 4. 26 (木)

関学での 10 年間をふり返って

村田 泰子

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」（マタイによる福音書 7 章 7 節）

今年で 10 年目

こんにちは。社会学部では家族社会学とジェンダー論を担当しています。村田です。今年度は春学期に社会学入門 A を担当したので、そちらの授業で顔を知っている方もいるかと思います。

今日は「KG スピリット」というテーマで、チャペル講和を担当させてもらうことになりました。私は 2009 年に関学に来て、今年で 10 年目になります。最初は右も左もわからない状態でしたが、10 年経って、最初の頃に比べたら少しは関学という大学のことも分かってきたかなと思っています。

さて、KG スピリットについて、おそらくは他の先生方が、関学のスクール・モットーである「マスタリー・フォア・サービス (Mastery for Service)」の精神やキリスト教の精神といった話はしてくださると思うので、私は自分がこの 10 年間に経験したことに基づいて、KG スピリットの一側面について話をしてみたいと思います。

出身大学院で「先輩トーク」を担当した話

話に入る前に、先月参加した、ある会合の話をしてください。先日、院生時代を過ごした京都大学の研究室の卒業生・在学生の交流会に呼ばれて、話をさせてもらう機会がありました。こんな風に卒業生と現役の大学院生とで交流会をするというイベント自体、初の試みでしたが、初回ということもあり、現役生を含め 100 人近い人が集まったかと思っています。

交流会では、卒業生 3 名が、それぞれの卒業後のキャリアの話をしました。みなさんも聞いたことがあるかもしれませんが、大学院を出ても全員がすぐに教員になれるわけではなく、長い下積みの時代がある人がほとんどです。そうした後輩たちに向けて、先輩として、自分がどのようにしてキャリアを築き、研究をつづけてきたのか、そうした経験を伝えるのが会の主旨だったと思います。

そのときのトークで、私に与えられたお題は「子育てをしながら研究者として前を歩む先輩の話」というものでした。このお題を聞

いて私は正直、「またか」と思いました。というのも、ここ数年、こういうテーマで話してくれと言われることがよくあるからです。私は研究のかたわら、3人の子どもを産みました。研究者としては多いほうだと思えます。だからこういうお題が振られるのは宿命といたしますか、仕方のないことだと思っているとあるのですが、あまりに毎回だと聞かされるほうも退屈だろうと思ったのです。しかし、元指導教官に相談したところ、最近の大学院生は割と早くに子どもを産む人が増えていて、キャリアをどう築いていくかに悩んでいる人が女性も男性もいるということだったので、こんな自分の話でも何かの役に立てるのならと、引き受けることにしました。というわけで、今日はそのときのトークで話した内容を振り返りつつ、KG スピリットについて私が感じていることをお話ししたいと思います。

寄り道だらけのジグザグな道と「半端な選択」

最初に、院生会で話した内容ですが、私は研究者としてそんなにきれいに真っすぐ歩んできたわけではない、むしろ寄り道だらけの、ジグザグの道を歩んできたという話をしました。そもそも私の学部での専攻は英語でした。大学3回生のとき留学した先のイギリスで、あまりに自分が日本社会のことを知らないのもっと知りたいと思ったのが一つのきっかけで、社会学を勉強し始めました。また、やはり留学中、日本では女性は大人しく、にこにこ笑っていればそれなりにやり過ごせるけれども、イギリスでは女性も強いし、授業でもどんどん自分の意見を発言す

る、そうした様子を目の当たりにして、自分の中にある女らしさを見直すようになりました。それも社会学という学問に惹かれた一つのきっかけです。

そういうわけで、大学院から社会学を専門に勉強し始めました。人より遅れてスタートした分、時間がかかりました。イギリスのランカスター大学というところで修士号を取った後に、京大の大学院にまた修士から入り直したので、すでにこの時点で2年間ほど遅れていたわけです。普通の人は大学、大学院とすべてストレートで来た場合、27歳くらいで博士号を取る計算になりますが、私は20代、まだまだ修業中の身でした。やっと20代が終わるころ、博士論文のテーマも決まり、非常勤講師としてぼちぼち近隣の大学などで教え始め、ようやく研究者としてやっていけるかなと思いついた矢先に、あろうことか妊娠しました。

そのことで、人並みの苦勞はしました。どういう苦勞だったかということ、まず、博士論文が書けない。提出までに2年ほどしか時間がありませんでしたが、書けないのです。赤ちゃんの世話をしている物理的に時間が無いということもありますが、それ以上に、書けないのです。子どもが保育所に行っている時間は書けたはずですが、自分の将来に対しぼんやりと不安になるというか、頑張ってももう研究者にはなれないのではないかと、みんなからあの人は研究を辞めた人と思われているのではないかとといったことをぐるぐる考えて、しんどくなっていました。今考えれば、自分で自分を止めてしまっていたところもあったかと思えます。

しかし幸運なことに、博論だけは書けと言ってくれる先輩たちがいたお陰で、「そうだ

な、就職できるにせよできないにせよ、博論を書いておかないと就職は絶対にないわけだから、取りあえず書こう」と思い立ち、何とか書き終えることができました。それが32歳のときです。

博論が終わって、今度は博士論文の出版や就職活動をしないといけないのですが、そこで運がいいのか悪いのか、夫が2年間の予定で、イギリスに在外研究に行くことが決まりました。えー、どうしよう、と思いました。いや、本当のことを言うと、ほとんど迷うことなく、ついて行くことに決めました。いい加減でしょう？（笑）私はこういう決断するとき、あまり迷わないのです。迷うときもありますが、この時はイギリスに行きたいと思い、非常勤の仕事も後輩に譲って、ついて行くことに決めました。

こうしたことは、周りから見ればすごく半端に見えるかもしれませんが、自分の中には大事なものがいくつもあって、研究もしたい、就職もしたい、でも英語も好き、イギリスも好き、家族も大切にしたいという、そういうときに相反するようなさまざまな欲求に正直であろうとしたら、結果としてこうなったのです。まあイギリスに行ったお陰で日本とは全く違う子育て文化も経験もできたし、現地調査もしたし、こういういい加減な性格がプラスに働くこともあるかなと、今ではわりと開き直ってはいえますけれども。

半端な自分に期待してくれたことへの感謝

しかし、半端なことをしてきたツケは、いつか回ってくるものです。私はそれを就職してから感じました。関学に職を得たのが

2009年4月、36歳のときでしたが、最初の10年ほどの間は、自分の力不足を感じずにはいられませんでした。

というのも、第一に、視野が狭い。自分の研究は何とか細々とつづけてきたけれども、それ以外のことを知らない。これはとくに講義をしているときに感じました。第二に、研究者のネットワークが少ない。第三に、国際的・学際的な研究プロジェクトに参加した経験が少ない。それらが自分に欠けていることを自覚してからは、ひとに紹介してもらって新しい研究会に参加したり、ボランティアを始めたり、また、元指導教官のところに行ってプロジェクトに入れてくださいとお願いしたりと、キャッチアップのための努力をしてきました。

そんなわけで、まだまだ力不足であったわたしに、何かしらの働きができると思込んで、採用してくれた関学には感謝しています。わたしは採用された当時、すでに二児の母でしたが、それを理由に落とされることはありませんでした。また私の場合、たまたま夫が先に関学で職を得ることが決まっていたのですが、それを理由に私が落とされることもありませんでした。関学は人事において、その人が結婚しているかとか子どもがいるかではなく、その人の個人としての研究能力や業績、人柄で採用してくれる、そういう大学であると思っています。

関学の育児支援制度

また、関学に着任してからも、いろいろな形で周囲にサポートしてもらいました。皆さんご存知かわかりませんが、関学には、女性研究者支援制度という制度があります。これ

は、小学校卒業までの子どもを育てている女性教員に、研究支援員と言って、研究の補助をする人をつけてくれる制度です。教員ばかりではありませんが、小さい子どもを育てていると、本当に時間がありません。夕方には子どもの保育園に迎えに行かないといけませんし、夜は子どもと過ごす時間も必要です。また、子どもが熱を出したとき、夜間や休日に仕事があるときには、ベビーシッターのアレンジもしないといけません。私もこの制度を使わせてもらって、ずいぶん助かりました。

また、社会学部独自のサポート制度として、子どもが3歳になるまでは夕方6時以降の授業や会議を免除してくれる制度があります。これは男女問わず使うことができ、本当に助かりました。

そういうフォーマルな制度に加え、周りに同じような状況で働いている女性教員がたくさんいることも、すごく励みになりました。小さい大学だったら、女性は自分一人という話もよく聞きますが、関学は社会学部だけで50名を超える教員がいて、その4人に1人は女性です。もちろん、女性であるというだけで皆が同じ経験をしているわけではないですが、自分以外に子育て中の人がいることは安心したし、新たに妊娠・出産する人がいれば励ましたいと思いました。また、結婚や出産をしているかいないかにかかわらず、人生の先輩として、先を歩む同性の先輩たちの姿から学ぶことは多かったです。

というわけで、今日は私自身の経験に基づき、皆さんがおそらくは未だあまり意識したことがないであろう、関学の側面について話をさせてもらいました。それはすなわち、女性が女性であるという理由で女性を排除しない大学、また女性が働きやすい大学として

の関学です。

「多様性こそが私たちのコミュニティの強さである」という考え方

ところで皆さんは、「インクルーシブ・コミュニティ宣言」という言葉を聞いたことがありますか。これは2014年、今日ここにおられるグルーベル先生が関学の院長をされていたときに、大学として、関学をこのようなコミュニティとして作り上げていきたいという思いを込めて出された宣言です。

インクルーシブという言葉は、英語の動詞インクルード (include) から来ていて、何かを内へ含み込むということの意味をしています。その反対はエクスクルード (exclude) で、何かを排除するという意味です。宣言にはこのように書かれています。「このコミュニティに集うすべての者—学生・生徒・児童・園児、教員、職員、同窓、およびその家族—は、性別、年齢、国籍、人種、民族、出身地、主たる言語、宗教・信仰、身体的・精神的特徴、セクシュアリティ、あるいは経験や知識、文化や学問的背景など、それぞれ異にしています。関西学院は、こうした違いのあることを尊び、この『多様性 (ダイバーシティ)』こそが私たちのコミュニティの強さであると信じています」。

「多様性こそが私たちのコミュニティの強さである」という表現は、個人的にとってもいいなと思っています。異質な者を集団にとってマイナスとか、足手まといと捉えるのではなく、ここに書かれているように、集団にとって強さであると捉えることができたらと思います。

今日は女性というマイノリティの立場から

話をしましたが、私自身、別の状況では、マイノリティではなくマジョリティの側に立つこともあります。たとえば私は結婚していること、子どもがいることで、ある場面では強者の側に立つこともありますし、日本人であること、異性愛者であること、専任教員という職を得て働いていることなどで、やはり強者の側に立っていると言えます。大切なことは、そのときどきの状況において、異質な存在をどうやってインクルードしていくのか、

知恵を出し合うことかなと思います。

皆さんはまだ関学に来られたばかりで、それこそまだ右も左も分からない状況かもしれませんが、関学という大学が大切にしているこうした精神にも注意を向けてもらえたら嬉しいです。来月には、性の多様性を尊重するイベントであるレインボーウィークのイベントも予定されているので、関心のある方は参加してくれたらいいかなと思います。

(社会学部教授)